

墓誌研究序論

1 研究の動機

(1) 石刻への好奇心

「墓誌」とは死者の追悼のために作られた文であり、通常、石に刻されて墓中に納められている。「墓誌銘」ともいう。墓誌の起源は、秦時代の葬磚と指摘する者もあるが¹、典型的な墓誌文の構成を見ることができるものは後漢時代からである²。

紀年のある資料で最も古いものは、後漢の明帝時代の「姚孝経墓誌」(永平 16 年 4 月 22 日、AD73 年)である³。この墓誌は磚質である。後漢時代には、通称「墓誌碑」と称される地中に納められた小型の碑や、画像石とともに刻された画像石題記にも墓誌に相当する文が見られ、誌石の形式がまだ成立していない。誌石の形式が平たい正方形の石(蓋石と墓誌石)を二つ重ねた形が、北魏時期に広く普及するようになった⁴。

私が石刻に関心を持ち始めるようになったきっかけは、筆跡としての魅力もさることながら、石刻文字がどのような環境下で作製されたのかを知りたいという好奇心からである。日頃、書の表現として、石に刻んだ文字を展覧会等で発表することは、篆刻作品以外にはあまりない。これは紙という素材があり、扱いやすく多様な表現に応用できるという利点を持っているからであろう。しかし、歴史を振り返ってみると、書の表現の材料として紙が広く使用されるようになったのは、宋代以降のことであり、本研究が対象としている魏晉南北朝あるいはそれ以前の中国の文字資料においては、近年長江中流域出土の簡牘等の肉筆資料⁵が出現しているが、依然として、石に刻んだ文字資料が大きな割合を占めている。

石刻文字資料には、漢代の石刻資料である「漢碑」、南北朝時代以降急激に普及し現代まで続く「墓誌」、仏教の広まりとともに急激に増加した造像銘、その他画像石題記等があるが、内容的に特に共通性があるのは漢碑の種類である「墓碑」と「墓誌」である⁶。この二者は、死者を顕彰・追悼するために作られたもので、形や置かれる場所こそ異なるものの、死者の名や業績を記した記念物として共通している。文の構造上も序文と銘文を備えた墓碑の文章形式が墓誌の文章に流入していることは間違い

¹ 大橋修一氏は、秦始皇帝陵西側の趙背戸村から出土した瓦文は、墓誌の祖型をしめす作例として指摘している(春名好重主編『書道基本用語詞典』851頁(中教出版、1991年))。

² 水野清一氏は「(墓誌で)最初のもは、王莽の居撰2年(AD2年)になる祝其卿と上谷俯卿の墳壇刻石と呼ばれるものである。」と指摘するように(『書道全集』第6巻 中国・南北朝Ⅱ、31頁(平凡社、1966年))、諸説あるものの誌文の構造が明確になるのは後漢になってからである。

³ 洛陽市第二文物工作隊『洛陽新獲墓誌』(文物出版社、1996年)。

⁴ 墓誌の形式については、第一部第三章「墓誌の形」を参照のこと。

⁵ 長江中流域の簡牘出土に関しては、枚挙にいとまがない。古くは睡虎地秦簡、近年では張家山漢簡、里耶秦簡等がある。

⁶ 明の王行の著した『墓銘挙例』には、内容に関して十三の項目が挙げられている。具体的な記載は第二部第三章に譲るが、墓碑の記述内容が墓誌に流入したことは間違いがない。

ない。石刻の文字に関心を持ち、石の形式や文の構造などに興味を持って関係資料を搜集している中で、墓誌資料が多量であるにもかかわらず、極めて一部の資料しか名筆として扱われておらず、不十分であるといわざるをえない。そこで広く墓誌を取り上げて追求することにした。

(2) 墓誌の魅力

石刻資料の中で、墓誌に魅力を感じ研究の対象とするようになった主な理由は、次の諸点である。第一点は、墓主の伝記が史書に残されていることである。後漢時代の墓碑に書かれる人物の多くは、伝のない地方官僚のものがほとんどであるのに対し、墓誌に書かれる墓主は、『魏書』『北史』等の中国の正史に記載されている人物が多く含まれている。これにより、誌文の記述と正史の記述を比較することができ、その違いや史書に見えない記述から、歴史的な知見を深めることができる⁷。

第二点は、数量の多さである。例えば漢碑が約二百件であるのに対し⁸、魏晉南北朝時代の墓誌は1,000件を超える資料がある。更に1件あたりの字数に関しては、平均的には墓誌銘の方が倍以上あるであろう。それだけ情報量が豊富ということになる。

第三点は、書法的な魅力である。特に北魏の墓誌銘の書は、同時代の造像記・写経と並んで、特徴ある楷書作品として知られている。高等学校芸術科書道の教科書では取り上げられることは少ないが、南北朝の墓誌銘には、後の隋唐時代の楷書作品と比較してもひけを取らない出来と思われるものがある⁹。北朝の墓誌についても、同時代の書跡の中で、墓誌がもっとも技法的に高度であり、品致の高いものが相当数存在する。これらを鑑賞に堪えうる作品として評価し、教材等への利用を図っていくことにいっそう目を向けるべきである。

第四点は、女性の記録が多いことである。魏晉南北朝時代は争乱の時代であり、常に支配勢力の衝突が避けられない時期であった。日本の江戸時代以前には、中央の統治者と地方領主が盛んに婚姻を結んで地域の安定を図ったのと同じく、この時代も元氏一族と地方有力者が婚姻を行うこと、地方領主間で婚姻を行うことの例も多く見られる。そもそも正史は男性の記録が中心である。女性の伝としてまとまった資料は、皇后列伝や列女伝があるが、その他の資料といえ、男性の伝中に散見されるものを拾い上げるしかない。しかし、墓誌には女性のために作製されたものがある他、妻子の記録が刻されることが一般化していることから、女性の名や嫁ぎ先を知ることができ、それにより氏族間の婚姻関係を明らかにすることができるのである。

2 研究の方向

⁷ 石刻資料には歴史書に記述のない官職が多くある。体系的に考えられる官位制度に「僧官」がある。高敏氏は、石刻資料から見る僧官の一覧を抽出している（『秦漢魏晉南北朝史論考』「從金石萃編卷30敬史君碑看東魏北齊僧官制度」(中国社会科学出版社、2004年)）。これは一例に過ぎないが、石刻資料から知ることのできる情報の整備は、非常に遅れていると言わざるを得ない。

⁸ 概数の把握は、京都大学人文科学研究所編『漢代石刻集成』(同朋社、1994年)によった。

⁹ 例えば、齊の永明五年(487)に作製された「劉岱墓誌」は、唐代楷書と見間違うばかりの書きぶりであり、墓誌の筆跡を観察する上でなくてはならない資料である。

(1) 墓誌研究の現状

墓誌が盛んに発掘されるようになって 100 年、21 世紀を迎えた現在、墓誌研究の現状はどのような状態と言えるのか。先行研究を分析すると、以下の現状と問題点が明らかになってきた。端的にいうと、「墓誌研究はどのように切り込むべきか、その糸口すらつかめていない。」というのが現状のようである。この現状把握は、即ち問題点の把握であると判断し、重要と思われる内容をまとめてみることにした。

① 墓誌研究といわれるものは、資料紹介が中心である。

従来の研究においては、墓誌資料は、史書の不足を補うために利用するという考えが支配的であった。近年特に、魏晋南北朝の研究書において、墓誌資料を取り入れて論述するものを見かけることが多くなってきた。しかし、それは墓誌の研究ではない。墓誌に関わる研究と言え、目に付くものは考古学関係書に掲載される出土報告などの「資料紹介」である。「簡報」とした報告には、墓誌銘の考釈や分析を加えるものさえ少ない。

また、墓誌に関する目録・図版類は多くあるが、墓誌研究の专著は極めて少ない。中国学・歴史学の研究においては、文献資料のみの考察から、出土資料を中心とした研究手法に切り替える研究者が増加しているが、墓誌研究についてはまだまだ十分ではないと言わざるを得ない。墓誌を総合的にとらえて論述するものは皆無に近く、その前提となる墓誌資料の整備も不十分である。墓誌に関する研究書としては、以下の著作が主なものである。

表1 墓誌の专著

	書名	編者	出版社	出版年
I	『漢魏南北朝墓誌集釈』	趙万里	科学出版社	1956
II	『河南碑志叙録』	河南省文物局	中州古籍出版社	1992
III	『河南碑志叙録2』	河南省文物局	河南美術出版社	1997
IV	『洛陽出土墓誌研究文集』	洛陽古代芸術館	朝華出版社	2002
V	『古代墓誌通論』	趙超	紫禁城出版社	2003
VI	『古代石刻通論』	徐自強	紫禁城出版社	2003
VII	『隋唐墓誌書蹟研究』	張同印	文物出版社	2003
VIII	『齊魯碑刻墓誌研究』	頼非	齊魯書社	2004
IX	『新出魏晋南北朝墓誌疏証』	羅新・叶燁	中華書局	2005
X	『洛陽新出土墓誌積録』	楊作龍	北京図書館	2005

厳密に言うと、これらの著書も墓誌研究の专著ではないものが多い。墓誌銘の考察には、たいてい「I」の引用がある。これは見識ある書物とはいえ50年前に編纂されたものであり、近年発掘の資料を加えていない等、今となっては問題点も多い。墓誌資料を調査する過程で、多くの先行研究を目にしたが¹⁰、

¹⁰ 墓誌に関する研究論文は、专著に比較して多く見ることができる。ちなみに日本のサイト中では東洋学・考古学関連の論文収録数の多い京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターの「東洋学文献類目検索」(通称 CHINA3) を利用し、「墓誌」という語で検索してみると 371 件がヒットする。

新旧資料を併せ墓誌を総合的にとらえて論述するものはほとんどない。

② 資料は重複が多く、整備されているとは言えない。

墓誌の研究を試みて最初にあたる壁は、資料の把握が難しいという点である。日本の研究者では、気賀澤保規氏が、中国では先に挙げた趙万里・趙超氏らが行っているが、目録が中心で、筆跡の考察には使用しにくい。また、目録や図版類にはかなりの重複があり、それらを整理しないと、研究の基礎資料が把握できないという状態にある。この故に、まず基礎資料の収集と整理から作業を始めることになった。

③ 1,000 件以上の資料群は、系統的な検討ができていない。

資料を整理すると、数量としてはほぼ 1,000 件あまりの墓誌があることをつかむことができる。ところが、墓誌銘の資料は使用場面によって扱いが違う。例えば、美術史においては墓誌の外形や文様等が問題視され、考古学では墓葬との関連性等が、歴史学では墓誌銘から読み取ることのできる事実（記述内容）に注目が集まる等、墓誌を巡って視点が分かれているのが現状である。さらに、その資料の使用状況は、全体を把握した上での利用とは言えないものが多い。研究分野が異なる以上、視点が分かれる事も当然であるかもしれないが、「この墓誌銘にはこのような記述があるから、これが歴史的事実だ。」とか「この墓誌は、このような形をしているので、当時はこのような形式が流行していた。」という記述が散見されるが、それが資料を広くとらえて検証しているのかと疑いたくなるような記述もある。

最も問題なのは、資料整備が進んでいない故に、目的に応じた分類ができず、総合的・系統的な検討ができていないことにある。例えば、「魏晋南北朝時代の墓主の男女比は？」「省別の出土地の割合は？」「北魏墓誌の中心資料は元氏一族の墓誌と言われるが、いったい何件あるのか？」など、概数としては述べることもできて、全体的な傾向がすぐには把握できないのである。研究資料としては、致命的になりかねない部分もある。自在に分析項目を設定するには、目録的な整理だけでなく、多様な検索のできる情報整理が必要であろう。

④ 書道史的な考察では、名品しかみていないものが多い。

書道の研究においては、墓誌の文字そのものを対象とし、その書体・書風等を分類していくことがオーソドックスな研究手法であると思われる。しかし、実はそのような墓誌に関する研究論文は少量であり、もっぱら単一作品の評価で、金石学的な解説を軸として、簡略な書法・書風に関する評語を付すという形式が多用されている。例えば、書道資料集としては代表格の『書道全集』¹¹の作品解説等を通覧しても、旧資料の解説には金石書からの引用が、新資料には出土報告書からの引用が中心であり、いったい書道とは何の研究がなされるべきなのか方向性が定まっていられないように思われる。これは、一つにはこれらの著書を作成する場合に、解説等を東洋史等の研究者に依頼せざるをえなかったということが一因であろう。また、科学的・客観的な視点を入れようとした場合には、書体・書風のみでの解説では十分とすることはできないというのが、このような記述形態を採らせたようにも思える。

また、書道研究の分野では、名品ばかりで論述しようという傾向が強いように思われる。たくさんの資料の中には、いいものもあれば粗雑な作りのものである。それらはすべて貴重な資料なのである。先に述べたように、全体把握ができていない資料の利用は、大変危険である。しかし、書道雑誌や教科書等では、一部の墓誌資料を扱うのみであり、それが長期間にわたって繰り返されているという現状があ

¹¹ 平凡社刊『書道全集』。戦前版も同様の形で解説している。

る。魏晋南北朝時代の墓誌を評価しようとするときには、少なくとも数百件の資料を念頭に置いて観察する必要があると思うが、現実には十数種類の資料が繰り返し利用されているに過ぎない。よいものはよいとする姿勢は重要なことではあろうが、視野を広げて観察するということが、客観的評価には欠くことができないと考える。

(2) 研究の姿勢

① 墓誌研究は「人の研究」

次に書道の研究とはどのように取り組み、切り込んで行くべきなのか、自分の姿勢を明らかにしておきたい。前述のように、書道を研究する者がそれ以外の研究者から求められることは、文字の組み立てや筆使い等、主として字形や書風に関するものであろう。しかし、墓誌研究においても、原石を見ることのできるものは相当に少なく、代表的資料ですら、通常は拓本でしか見ることができないのが現状である。

文字の歴史は人の歴史である。書道史研究のアプローチの方法としては、文字を構成する要素（点画）や字形の研究、美的な要素の分析、金石学・書論等の知見を取り入れた考察、美術史や歴史・考古学等の手法を取り入れた研究、思想や文学的検討を含めた研究等、種々の手段があると考えられる。漢字が生成し変遷してゆく風土や歴史を考えると、当然のことながら誰がどのような状況下で作製したのかという人間の行為についての研究が中心となる。墓誌においても、人間が記録のために作ったものであることは、他の文字資料と変わらない。つまり、書道研究の根底には「人の研究」があるが、それは人間特有の行為として文字を書くという営みがあることによる。であるから、人が作った文字を観察するためには、人を分析するために種々の方法があるように、種々の観察・分析の手法があってよいと考えている。

特に書道研究の対象となる文字は、周辺領域の研究にも使用され、研究成果を相互利用することは避けては通れないと思われる。文字を研究対象とする学問領域は、いわば表裏一体の関係ということがいえ、もともと学際的にならざるを得ないのであろう。また、客観性を求めるならば、美術史・歴史・考古・文学等種々の要素を含めないと、現代の研究に求められる科学的な証明や客観的な論証を行うことは難しいと考えている。

以上のような理由から、一つ一つの墓誌について筆跡としての特徴をとらえたり、筆跡としての優劣を論じることを主眼とするのではなく、可能な限り墓誌の出土状態の把握から文辞の内容の検討を行い、墓誌全体の姿を把握することを目指している。書風・書体の研究は、書道史研究の重要な要素であるが、墓誌研究の一部であると位置付けており、墓誌に関する多角的な視点からの研究を目指している。

② 墓誌を中心に据えた資料の観察

私の研究の基本的な姿勢としては、「墓誌」なるものを主役とする研究でありたいと思い観察を続けてきた。この点では、近年盛んに行われている「資料学研究」あるいは「出土資料研究」に共通する部分が多い。歴史の真実を明らかにするために墓誌を使用するのではなく、墓誌そのものの価値・作製意図を明らかにすることに重点を置いている。

本論では、墓誌を諸学の補充・傍証資料として利用するのではなく、墓誌研究を主目的として、資料

を収集・整理し、墓誌作製の目的や墓誌銘から読み取ることのできる事項、資料的価値に関して検討することにした。次章において資料を収集した報告書や墓誌研究の現状を説明するが、墓誌を対象とした専著は非常に少ない。墓誌が歴史資料として重要であるということは、考古学者・歴史学者・書道史研究者等一致した見方であるが、文献資料の補いでしかないという扱いしか受けてこなかったという事実がある。

近年「資料学」あるいは「出土資料学」という新しい概念の学問体系が築かれつつあるが、本研究はそれらの体系を念頭に置いたと言ってもよい。現在研究対象となる墓誌資料は、依然として旧資料が多くを占めるが、20～30年後には墓誌研究においても新資料が旧資料を上回ると思われる。簡牘等の肉筆資料と違い、1つの墳墓から何百もの資料が出土することはないのであるが、しかし新資料の数量は確実に増加している。将来出土するであろう新資料に期待しながらも、現在収集できる資料を最大限に活用し、考察を進めていくことにする。

中国の墓誌は魏晋南北朝時代のみではなく、明・清時代に至るまで長期間に渡って作製された。また、中国周辺の漢字文化圏へも普及した。漢字文化のひとつの結晶である。「楷書」という書体は、墓誌銘が楷書で書かれはじめる西暦500年以降からその基本的な文字構造(字体)を変更する事なく、現代まで伝えられてきた。もし構造上の変化が大きければ、この時代の文字を読むことが困難となり、現代との関連性も薄くなっていただろう。楷書という書体は、まさに「東洋の宝」と言ってよいものである。この事を認識し後世に伝えることは、教育の現場においても重要なことであると考えている。

3 問題の所在

(1) 疑問点

前述のように、墓誌は後漢時代後期の資料にその先駆けを見ることができる。また、魏晋南北朝時代を対象としているが、その数量がまとまって見られるのは、北魏の洛陽遷都(493年)以後である。その銘文からは、埋葬される人物の生前の業績を確認することができる。さらにほとんどの墓誌には、死者を顕彰する銘や辞がある。このことから、墓誌は死者を弔うために作られた墳墓の構成物の一つと考えることができる。

墓誌資料の所在を王朝別に見ると、北魏のものがもっとも多い。当然のことながら、過去に行われた研究の中心は、北魏墓誌にあった。しかし、数量的には少ないながらも南朝で作られた墓誌もあり、これらの観察も怠ることはできない。なぜなら、洛陽遷都後の北魏墓誌の急激な増加は、胡族の漢族文化の受容の結果であり、とうてい胡族のみで作上げたものとは考えられないからである。しかし、書道史の研究を振り返ってみると、墓誌等の北朝の書を「北方遊牧民族の作りあげた荒々しい文字」等と評価する記述が散見される¹²。このことは北朝の支配者が北方騎馬民族出身の胡族であることと、その胡族が書いた文字ということとを直接的に結びつけた結果であろうが、胡族がいかに漢族の文化を取り込もうと努力をしていたのかという歴史事実を知らない記述としか言いようがない。

¹² 例えば、霊園鴻甫氏が「上篇では北魏の龍門系の陰しい書風を見せる墓誌銘と…(以下省略)」とある等(『中国法書選ガイド26 墓誌銘集(下)』23頁「墓誌銘を楽しく習う」(二玄社、1989年))。

更に墓誌の全体像を把握しようとしても、墓誌資料の整理が十分行われていないという問題に直面する。北魏を中心とする書風解釈についても、皇族の墓誌等の一部の名品によって行われているのがほとんどである。全体像を把握するには名品主義から脱却する必要がある。

私が魏晋南北朝時代の墓誌について疑問や期待を抱いている事柄は、以下の10点である。

- ① 胡族は、なぜ墓誌を作ったのか。
- ② 史書に名を残す人物のものが多く存在するが、石刻資料（墓誌・墓碑・頌徳碑）の記述には信憑性があるのか。
- ③ ほぼすべての資料に墓主の死亡年・埋葬年・埋葬地・享年等が刻されているが、作製年の確定は可能であるか。
- ④ 本籍・官職・世系・妻子の記録があるが、本人の業績のみならず一族の関連を図示することができ、数百件の資料群をグループ化することができるのではないか。
- ⑤ どの墓誌にもある銘・辞（四言詩）は、経書等の典故を踏んで極めて格調高い仕上がりになっているが、撰文者の文化水準はどのくらいであったのか。
- ⑥ 千差万別と思われる墓誌の筆跡にも書き手が同一であると推測できるものがあり、書き手による分類ができるのではないか。
- ⑦ 墓主の死亡から埋葬までの差が数ヶ月という短いものが多いことから、効率よく埋葬するシステムが構築されており、撰文・筆記・彫刻等の墓誌を作製するプロ集団が存在したのではないか。
- ⑧ 墓誌銘には異体字が多いと言われているが、現代でも使用されている文字はないのか。また、墓誌銘の文字の特徴は何であるのか。
- ⑨ 異体字について、生成や変遷あるいは伝播を系統的に見ることができるのではないか。
- ⑩ 墓誌銘資料が、教科書教材として十分に取り入れられていないのはなぜか。

（2）特に墓誌が誕生した背景に関連して

上記のような視点から魏晋南北朝時代の墓誌を客観的に観察することにより、墓誌という石刻資料がどのような価値を有し、多種多様な出土資料の中でどこに位置づけられるのかを考えることが可能になる。「線に深さがある」とか「造形力が豊かである」等という一作品のみの主観的な感想を述べる従来型の書風研究は、出土資料の性格を考える主観的な記述であり、実証的な研究者を説得することはできない。主観が入りやすい書風分析を客観的に高めてゆくには、その筆跡を成立させているさまざまな情報を加える必要があることは先に述べた通りである。

上記のような問題がある中で、魏晋南北朝時代の墓誌を捉えようとするときには、まず、墓誌の全体量や地域・年代を把握し、一部資料に偏ることなくすべての資料を平等に見る姿勢が必要となる。また、墓誌は人間の一生を綴ったものであるから、当時の社会・思想・政治や経済の制度・軍事・文化等、人の営みについて多方面から知ることが必要である。特に関連の深い東洋史や美術史等の成果を利用しつつ学際的に研究を進めるという方法は、石刻や墓誌研究に限らず歴史研究・芸術史研究の一つである書道史に求められることであると考えている。

北魏を中心とする墓誌の筆跡は、「漢化政策」や人民の強制的な移住により胡漢（胡族と漢族）の一体化が図られる中で作られたものである。ところが、前述のようにこれらを証明する方法として、書体・

書風の研究のみを行っても大方の研究者が納得できる論証はできない。なぜならば、魏晉南北朝時代の墓誌においては、撰文者・書者に関する内容をほとんど見ることができず、南朝人や漢族の影響を指摘することはほぼ困難であると考えられるからである。

私は、北朝の墓誌が生まれた背景として、胡族自らが漢民族の制度・文化を積極的に取り入れ、自国の習慣を高めようと努力した結果であろうと考えている。このことを明らかにするには、墓誌の形や文様・文字の刻される場所、さらには記述される内容の詳細な検討等、多面的な観察が必要であろう。また、例えばどの地域からあるいはどの身分から優れた筆跡が発生してきたのか等という具体論に入ろうとするときには、それぞれの民族を形成する種々のグループ（門閥・一族）がどのように活躍し文化を伝承してきたのかという、より詳細な人の動きを明らかにする必要性が生じてくる。この論点については、墓誌作製目的に関する仮説を論証するために、墓誌の銘文に残された婚姻や子供の記録から南朝と北朝の接点を探そうと考えている。既に私の先の研究では「誌石の外形は南朝あるいは漢民族から受け継がれたもの」という結論を得ているので¹³、この仮説を実証できれば、墓誌の文章からも南朝の影響を受けた事例が発見されることになる。これらのことは「胡族の筆跡は騎馬民族の作った完成度の低いもの」等という書道史上の従来説を覆すことに繋がると思われる。

4 研究の目標と方法

(1) 研究の目的

① 墓誌の作製目的と作製過程の推測

一言で「魏晉南北朝時代」といっても、それぞれの歴史・社会・文化等を把握することは簡単ではない。南北朝時代になって北方の胡族が中原に南下してくると、漢民族の文化と胡族の文化が融合して種々の新様式が見られるようになるが、この時代を深く捉えた研究者に谷川道雄氏がいる。この時代の国家に関して谷川氏は、

胡漢両族の共同体社会が相互浸透によって合体し、新貴族社会の国家を建設したという点に帰着する。それは中世的共同体の結晶したすがたであり、その意味において中世国家の完成と呼ぶにふさわしい。

と指摘しており¹⁴、まさにこの時代を的確に捉えた表現といえることができる。

魏晉南北朝時代の中で最も墓誌の作製数が多いのは、北魏時代である。特に北魏末期の洛陽遷都以後、急激に墓誌の作製数が増加することは周知の事実である。

洛陽遷都を行った孝文帝は、北魏の性格を大きく変えたといわれる。その象徴的政策としては、「姓族詳定」という官僚体制への門閥主義の編入がある。漢族の社会には、漢代以来制度化されてきた身分の区別や貴族の家格が存在している。胡族の側にもそれに対応できる身分体系を構築しようとした。重

¹³ 「六朝墓誌の形式についての試論—正方形の有蓋墓誌が完成する過程を追って—」『全国大学書道学会紀要』平成13年度号、100-109頁。

¹⁴ 『中国中世社会と共同体』116頁（国書刊行会、1976年）。

要なのは、官職がその氏族の身分体系に反しないよう分配されるようになったことである。

墓誌とその身分とは何ら関連がないようであるが、後述するように墓誌銘中の最も多い固有名詞は官職名である。特に男性の場合は量的にも女性よりも多いと見てよい¹⁵。また、墓誌作製の目的に関連して、子孫の名を明らかに残すために作製したのではないかという疑いのおこる資料が散見される¹⁶。このことは、墓誌が爆発的に増加する原因の一つとなっていると考える事ができ、「誰が、何の目的で、どのように作製したのか」を知るための重要な手がかりとなるのではないかと考えている。墓誌の作製目的を明らかにすることは、墓誌銘が誕生した背景を探ることにもつながり、先に挙げた多くの疑問点を解決する直接的な糸口になるのではないかと考えている。

② 墓誌銘の信憑性

墓誌銘などの記述に関しては、行き過ぎた記述、即ち真実とは異なる記録が多く、古来より「諛墓之辞」として批判の対象になっている。どの部分を「諛墓」とするのかは解釈の分かれる部分もあるが、本論では墓誌銘中に書かれる官職名について検討を加え、その記述の信頼性を考える。墓誌銘の記述は、墓誌作製の目的に絡む問題と捉えており、その視点での検討も本論での目的である。

③ 筆跡の特徴の把握

次に、書道史的な視点から研究の目的を述べてみたい。墓誌銘の書道史的研究に関してその中心的な内容とは、おそらく書体・字体・書風等の検討が中心になるであろう。確かに従来の石刻研究や作品研究を追ってみると、一点一点を丁寧に追って論述しているものを見ることができる¹⁷。しかし、それらにおいて時代的な共通性や相違性に関しては、十分に確認されているとは言い難い。更に解説や検討を加える対象は、一部の名品に限られ、網羅的に見ようとする姿勢に欠けている印象を持つ。

「書」を学ぶ者は、とにかく完成度の高い資料に目を取られがちであるが、1,000件もある墓誌資料の全体像を把握しようとするれば、資料整理の過程ですべてを見る必要に迫られる。実際の作業としては何らかの小さなグループに分けて見ていくことになるであろう。特に、墓誌の中心的資料である元氏一族の墓誌等は、筆跡においても重要な位置を占め、系譜を作成して丹念に観察することが重要である。このような基礎作業・分類作業ができて初めて墓誌の筆跡を観察することが可能になると考えている。このためには、例えば年代ごとに墓誌銘の筆跡を見るだけでなく、墓誌銘に書かれる種々の情報を的確に把握し、分類する必要があると思われるのである。

墓誌銘の筆跡の観察視点としては、女性・男性それぞれの身分と筆跡の完成度の関連、墓誌銘中に頻出する異体字の傾向、地方領主の墓誌の実情などから特徴を捉えてみたい。

④ 教育的活用方法の模索

上記の筆跡の特徴を把握した上で明らかにしたいことは、墓誌銘の筆跡が高等学校芸術科書道という教育科目にどのように利用できるかを検討することである。

出土資料の中で、墓誌銘は特に目新しさもなくセンセーショナルな印象も薄いため、筆跡の検証も十分できていない状態である。しかも、南北朝の石刻資料中では、造像記・鄭道昭の摩崖など重要視されている資料が多く、教材厳選の教育現場にあっては足を踏み入れる余地はないように思われる。しかし、

¹⁵ 本論第3部第1章・第2章を参照。

¹⁶ 本論第2部第3章を参照。

¹⁷ 代表的なものに、藤原楚水『図説書道史』第二巻（省心書房、1971年）がある。

墓誌は「東洋の形」といってもよい。南北朝時代の500年頃に正方形の形が完成して以来、清朝の1900年代以降まで継続的に作製されているのである。また、朝鮮半島など中国以外の地域にも影響を及ぼしている。このように息の長い作例を持つ資料は珍しく、東洋文化の一つと言ってもよいであろう。

「書」という東洋の芸術を学ぼうとする者には、このような伝統を意識することが肝要であり、これを含めた墓誌学習の意義を明らかにしていきたいと考える。

(2) 研究の方法

① 資料整理にあたり、DBを作成する。

この研究を進めるにあたり、最初に取り組んだことが墓誌の全体像の把握である。墓誌研究のバイブルとも言うべき著書は、趙万里・中国科学院考古研究所編輯『考古学専刊乙種第二号 漢魏南北朝墓誌集積』(科学出版社、1956年)である。墓誌研究においてこの著書の引用を見ないものはほとんどない。

この著書以降墓誌の专著は、目録・図版類以外はあまり出版されていない。このことは墓誌研究の停滞を示す一つの証拠となるが、1960年以降に考古学関連の報告書に登場し始める新出土資料に関しては、目録はあっても系統的な分類はできていないという現状である¹⁸。現在の収蔵機関についても、まとまった資料があるのは、陝西省の西安碑林博物館・河南省の洛陽古代芸術館・遼寧省の遼寧省博物館等数機関であり、民国時代に多くいた金石コレクターの収蔵品は、現在どこにあるか知ることもできない¹⁹。戦乱中に大破したか、博物館の倉庫にひっそりと眠っているのであろう²⁰。

そこで、旧資料・新資料を同時に取り扱える資料整理に取り組むこととし、新出土資料の出土等の情報の他、墓誌の寸法・作製年等を把握し、更には墓誌銘図版をも含んだ「魏晉南北朝墓誌データベース」を作成した。このデジタル化に関する作業は、墓誌が出土する限り永遠に続くが、活字本と異なり容易に追加ができることが利点である。更には検索機能を充実させることにより、従来の記憶に頼る資料検索からPCを利用したより詳細な検索ができるよう工夫している。

データのデジタル化を進める理由は、検索を便利にすることだけが目的ではない。先の『漢魏南北朝墓誌集積』を参考にすると、旧資料の大方は把握できるとしても、新資料となると中国国内にあまたある報告書に目を通す必要がある。墓誌の情報を多角的な視点で検討しようとする、それぞれの報告書

¹⁸ 近年出土の墓誌をまとめたものに栄麗華編集、王世民校訂『一九四九—一九八九 四十年出土墓誌目録』(中華書局、1993年)があるが、魏晉南北朝時代の墓誌は120件、情報量も限られており、実用性にはやや欠ける。

¹⁹ 墓誌の所在地は、新旧資料を含めて把握することが困難である。墓誌の資料的価値はあまり高くないと判断するためか、または重量物であり展示が難しいとするためか、倉庫等に納められて、実見できるのは一部の博物館等に限られる。民国時代には呉文道・徐森玉・陶蘭泉等のコレクターがいたことを知ることができるが(王壯弘・馬成名『六朝墓誌檢要』(上海書画出版社、1985年))、現在の墓誌の所在を知ることができるものは少ない。なおこの書の巻末には、402件もの引用書を掲載しており、主たる金石書はすべて網羅して目録作成がなされていると思われる。

²⁰ 中国全土の博物館を訪問し、墓誌の所在調査を行った訳ではないが、例えば河南省洛陽市の東に偃師商城博物館がある。この博物館は後漢墓誌碑の新出土資料として有名な「肥致碑」、顔真卿が書者となった「郭虚己墓誌」等が収蔵されることで知られる。博物館の職員に聞いた所では、収蔵庫等に相当に古い資料があるが積み重ねているだけで、目録等もないということである。比較的墓誌研究の進んでいるこの地でもこのようであり、後は推して知るべしであろう。

を何回も開く必要がある。必要な情報をもれなく引き出しその効率を高めるためには、現時点ではこの方法がもっとも有効ではないかと考えている。

② 資料分類にあたり、系図を作成する。

1,000件以上の墓誌を対象として研究を進めるにあたり、研究対象をある程度細分化する必要がある。従来の分類方法は、年代別・地域別の分類が主体となっていた。従来の研究手法にも活用すべき点はあるが、魏晉南北朝時代の墓誌を見ると、西暦500年から570年頃までのきわめて短い時期に集中して作製されており、地域も一部地方領主のものを除くと、洛陽周辺に埋葬されているものが圧倒的に多い。この点から地域差や年代差を見ることはきわめて困難であると言える。この特殊とも言うべき資料群を分類するには、皇帝一族の資料（支配者）と地方領主（被支配者）のものに大別する他、皇帝一族については『魏書』『北史』等で使用されている「〇〇皇帝族」という分類を行うこと、地方領主については、一族ごとに分類して検討することが妥当な手法と思われる。この分類方法では、一族・血族ごとに家系図を作成する必要があると思うが、墓誌銘を構成する文書内容を参照すると、比較的簡単に家系図を作成することができる。

また、墓誌の分類に関しては、近年新しい手法を見ることができる。その手法とは、墓誌銘に記載される埋葬地から墓主のグループ分けをしようと試みるものである。墓誌銘の文書構成については後述するが、多くの資料に死亡地・埋葬地が記述されている。その中で洛陽北の邙山に埋葬される墓誌については、かなり詳細な埋葬地の記述があるものを見ることができる。このような手法も魏晉南北朝時代の墓誌すべてに用いることができる訳ではないが、有効な分類手段の一つと言えるであろう。

③ 官位に関わる記述や内容が正しいか検証する。

墓誌銘の記述には、出土資料の中では特筆すべき特徴がある。墓誌銘に記述される人物は、多くが貴族であるが、その中でも高位のものが含まれる。それらの人物中には正史に伝が残るものがあり、その人数が相当数ある。これを有効に活用したいと考えている。正史の伝にも官職名が記されており、墓誌銘との比較が可能である。どちらが正しいかは断定できないとしても、その記述の差については明らかにすることができるであろう。

また、墓誌銘の文中に「系譜」と思われる記録がある。この記録に関しては、墓主とは直接的に関連はないが、墓主の周辺に関わる記述として載せられているのであろう。問題は、この分量が墓誌銘全体の相当を占めることもあり、墓主の記録に先んじて載せられる事もある。この理由に関しては、当時の流行に関わるものようであるが、墓誌銘の実際について観察する必要があるであろう。

さらに、官位に関連する内容として、官位と墓誌の大きさに関連性があるのか、官位と書的關係は関連性があるのかなど多くの疑問がある。これらを内容分析と書的分析に分けて検討してみる。

④ 墓誌銘の作者・刻者を探る。

魏晉南北朝時代の墓誌銘には、誰が墓誌銘を作製したのか、あるいは四角い石灰岩に誰が文字を彫刻したのかが明示されている資料は極めて少ない。しかし、墓誌作製の過程を推測するためには、作者や刻者の検討は避けては通れない大問題である。

墓誌銘には紀年がなされていることは周知の事実であるが、この紀年の方法には三種類ある。卒年・葬年と墓誌の完成年である。これに付随する作者等の情報を加えることにより、ある程度は墓誌作製の過程を明らかにすることが可能になるとと思われる。

⑤ 女性の記録に注目し、その資料的価値を明らかにする。

墓誌及び墓誌銘に特徴的なのは、女性の墓誌があって、女性の記録が多く残されていることである。多くの歴史書に女性の記録が全くないというわけではないが、主たる記述は皇帝やその一族の男子、顕著な功績のあった男子及びその男性の子供についてである。

正史等の記録方法と墓誌銘の記録方法は、基本的にはその人物の一生を追い、顕著な功績や与えられた官位等を記録するものであるから、両者の違いはそれほどないと言える。文書の歴史からすれば、埋葬に関わる石刻資料でこのような記録方法が用いられるようになったのは、後漢時代の墓碑あるいは墓誌であろうから、中国史上、正統な歴史書の第一である『史記』の方が早いととらえることもできよう。しかし、女性の記録に関しては内容の詳細さが全く異なり、墓誌銘のみによって明らかにできる事実も多くある。また、女性の婚姻に関しては、歴史書には記録があまりないが、墓誌銘の中には「○○は○○郡の○○に嫁いだ。(夫の)父親は○○であり、官位は○○である。」等という記録方法が多く用いられている。このことは、その一族に女性がいたということだけでなく、一族と一族を婚姻で結ぶ習慣があって、そのことが無用の戦闘を避け、地域の安定に繋がったという解釈を可能とする。

一族の全体像をつかもうとするときには、女性の存在は欠かすことができず、その存在が墓誌銘により明らかにされることも重要な意味を持つと考えている。

⑥ 墓誌の筆跡を多角的に検討する。

前述の整理が終わって初めて検討が可能になる内容であると思うが、書体・書風等の検討については重要な意味がある。従来的手法ではおそらく「出来がよい・悪い」「文字が強い・弱い」等の評価が作品研究になるのであろうが、本論では可能な限り主観的な表現は避けたいと考えている。筆跡の評価は、古来より書論にも多く見ることができ、その用語を現代の研究に直接用いることは適当ではあるまい。本来ならば、墓誌の原石一点一点を実地調査し、刻法まで明らかにすることが理想であるが、先に述べたように、一部の資料を除いて所在が不明確であるために、本論ではそれを調査することはできない。文字の善し悪しに関しては客観的な証明が難しい。これを他者に理解してもらうには、周辺の情報を加味しながら書きぶりも加味して説明する方法が最良であると考えている。

もう一点注目すべきは、墓誌銘中に見られる異体字である。墓誌銘の文書が誰によって撰文され、誰によって書かれたのかという記録は、墓誌銘中ではあまり見ることができない²¹。ただ、墓誌銘中の「銘」といわれる四言詩を読んで見ると、経書・類書からの引用が頻繁に行われ、まさに知の結集であると言える。このような文章が誰にでも作ることができるとは考えにくく、高度の知識を有する人物、すなわち官僚や貴族ということが考えられるのである。異体字の使用もそれと関係があるのではないか。

墓誌の異体字を追っていくと、それを多用するものとほとんど用いないものに分けることができる。異体字を用いることが、当時の流行であったのかどうかははっきりしないが、異体字の使用頻度を確認することは、文字観察の中心となるであろう。

⑦ 現代教育における墓誌銘学習の意義を考える。

歴史学的手法を取る墓誌研究を他分野へ利用することは、なかなか難しい。しかし、教育的な興味

²¹ 例えば北魏正光五年(524)に作製された「比丘尼統慈慶墓誌銘」には、「征虜將軍中散大夫領中書舍人常貴文(撰)。李寧民書。」とあるが、この両者がいかなる人物であり、墓主とどのような関連があるかははっきりしない。

と重なる部分として、二点を挙げるができる。

一つは、常用漢字についてである。墓誌銘と常用漢字は何の接点もないように思われるが、常用漢字の字体の原型は南北朝時代にあり、楷書の字形の安定性を証明する資料となる可能性が高い。常用漢字1,945字と墓誌銘の文字を比較し、一致するものがどのくらいあるのか確認する。

もう一点は、魏晋南北朝の墓誌銘資料が、教材として利用することができるのかという点である。そのためには、現在の高等学校書道の教科書で、墓誌銘がどのくらい活用されているのかを調査し、その問題点を明らかにする必要がある。教科書中に墓誌銘が積極的に利用されている事例は少なく、その原因も併せて調査する必要があるであろう。

また、南北朝の石刻資料中で墓誌銘はどのような特徴があり、それを学ぶ事にどのような意義があるのか考える必要がある。特に文化や歴史の継承・伝達という視点からの考察を行いたい。

追記 最近、北魏の墓誌研究の方法について質問を受けることが増えてきた。これは、石刻資料の出土報告が相次ぎ、これに注目が集まることが多くなった影響だろうと思われる。研究の方法論を語ることは僭越であり、私以外の研究者に伺ってほしいと伝えてきたが、自己を省察する意味からこれまでに行ってきた研究の方向性を振り返ることにした。少し前の文書を修正したので、書誌データなどの追加は今後の作業であることをお断りしておきたい（平成30年3月30日）。